●事　例●

学生の「キャリア意識」形成について感じたこと
～現代GP「実践的総合キャリア教育の推進」プログラムを担当して～

山田　泉
（法政大学　キャリアデザイン学部教授・学部現代GP主任）

一　当世学生気質と本学部の教育

今から四年ほど前だったと記憶していますから、二〇〇五年のことだったか、本学の付属の女子高校で学部説明会を行ったときのことです。「付属生」にとってはこれら大学の各学部からの説明を聞くなどして志望学部を決めることになるので、大切な機会なのだと思います。生徒と保護者が階段教室に六、七〇人いたかと思いますが、一時間ほどで説明と熱心な質疑が終わって、皆さんは教室から出ていきつつあり、わたしは荷物を整理していました。すると、階段教室の上のほうから生徒が三人降りてくるのが分かりました。わたしのそばまで来て、すこしためらってから、その中の一人が「先生。質問してもいいですか」と声を掛けてきました。荷物整理の手を休めてそちらに向き直って、「いいですよ。今日はそのために来ていますから、何でも聞いてください」というと、やはりその一人の生徒が、「先生の学部では、昼ご飯を一緒に食べる友達はできますか」と一気に言いました。

わたしは、質問の言葉は理解したのですが、質問の趣旨

が分からず、「うっ」と言葉を飲み込んでしまいました。しかし、三人の生徒たちが真剣な眼差しでわたしの表情に注目し、答えを待っているのに気付き、質問の趣旨に思い当たりました。「そうか。今の女子高校生が学部を選ぶときに最も大切にしていることはこれなんだ！」と。受け入れ側の大学教員として複雑な気持ちになりながら、「心配しなくても大丈夫ですよ。うちの学部は入学してすぐ、合宿でオリエンテーションがあって、みんなすぐ仲よくなりますよ」と、ほほえんで答えました。すると、三人ともパッと顔を明るくして、一斉に「分かりました。ありがとうございました」と弾んだ声で言いながら、ペコッと頭を下げました。三人はにこっとほほえみを返すとそのまま振り返って教室の上の出口に向かって明るい話し声を残しながら登っていきました。

ちょうどこの日の夕方の授業がゼミだったのでこのことを学生たちに話しました。すると三年生の女子学生が、「そりゃそうですよ。一年生の女の子が学食で一人でご飯食べてるなんて、かわいそすぎます」というのです。また一つ当世の学生気質を学びました。そうしたら新聞に、一人の時は人目を避けトイレで食べる人がいて、「便所飯」や「トイレ飯」などと呼んでいることが紹介されていました（朝日新聞〇八・〇八・三〇夕刊／〇九・〇七・〇五夕刊）。

専任教員の間で、本学部は「自分探しの学生が多い」などといわれています。この「自分探し」と「便所飯」に現れている相互依存の心理はその根が一緒なのではないかと思います。つまり、日本社会が現在に至るまで続けてきた集団主義・共同体社会の終焉にありながら、いまだ個人主義・市民社会が育っていない中で、若者が個人として近代的自我への移行をためらいもがいている姿が垣間見えるからです。

わたしの基礎演習科目の「アイデンティティ形成」では、徹底的に自分探しをします。自分を探すことで、過去から未来に続く人と人とのつながりを自覚する一方で、個人は、構成員としてその責任主体でもある帰属社会との関係性の中にしか自分が見つからないことを理解してほしいと思っています。集団主義・共同体社会にあっては、人と人とが相互依存しているかぎり、あるいは人が社会と一体であるかぎり、人はその存在を脅かされることはなかったのです。ですから、「人はなぜ生きるか」という問いはあっても「自分とはだれか」という問いはあり得ません。相互依存という保護膜を破って、裸の自分が責任を持って、帰属集団の在り方を考え、創造し再創造していく主体の一員となる覚

悟とその能力がなければなりません。

どんな社会でも、その構成員に対して社会が求める「世界の見方」を教える隠れたカリキュラムを持っています。そして個人主義・市民社会より批判的見方が少ないだけ、集団主義・共同体社会ではそれが強いと思います。この学部の目標である「自らの人生を設計（career design）する」ためには、自分がこれまで教え込まれてきた「世界の見方」に気づき、それを批判的に読み解くことで、これからの自分作りの責任主体としての自分を自ら作っていく必要があります。それは、さらに一生続く「学びと評価（lifelong learning）」の中で続けられていくのです。ですから、本学部のすべての学生には学部時代にその方法を獲得してほしいわけです。

しかし、本学部入学後、一気にそのようにすると逆効果になることもあります。その方法は教員集団こそ知恵を絞って考えなければなりません。そこに、表記の現代ＧＰプログラムの導入の理由があります。

二　本学部の学生気質

本学部は二〇〇三年度に設置された若い学部です。当時、キャリアデザイン学部という名称（はじめは「生涯学習社会学部」という名称で文部科学省の設置審査を受けていたのが、学内事情によって今の名称に変更されたといわれています）から、受験生には「いったい何を学ぶ学部なのだ」といった疑問を強く持たれたと思います。受験生は既存の学部でも何を学ぶのかはよく分からないのかもしれませんが、さすがにこの学部は中身を改めないで受験するのはあまりにリスクが大きいと思ったのでしょう。多くの受験生が学部の目的、目標、教育内容・方法などをよく調べて受験したようです。少なくとも入学した学生の多くはそのようにいっています。つまり、この学部を自分なりに調べて学ぶ決断をして入学したということです。また、教員集団も新たなコンセプトのもとに創設した学部ですから、プランは綿密に練ってはいても、正直なところ「やってみなければ分からない」といった気持ちがなかったとはいえないでしょう。入学早々の一年生に当時の学部長はじめ教員集団は、「どんな学部にするか一緒に考えましょう。そして一緒に学部を作っていきましょう」と言ったり、一年生全員対象の「入門ゼミ合宿」（前述した、当時は二泊三日で行う学部オリエンテーション合宿）で、学生に対し「キャリアデザイン学部とは何かを考え、後輩に学部を紹介する

材料を作成して、模擬プレゼンテーションをする」という課題でグループワークを行ったりしました。考えてみれば、新入生が教員に一番聞きたいことがそれで、当然オリエンテーションではその説明があるのかと思って参加したら、三日間の中心作業が自分たちでそれを作ることになるとは、びっくりしたのではないでしょうか。

このような学部のすべりだしだったので、学部一期生の多くは積極的で、主体的に学部作りを提案し、一方の担い手になっていきました。そして、この一期生が二年生になると新入生の履修相談会を企画したり、入門ゼミ合宿のサポーターになったり、留学生のチューターになったりと学部での自主活動やボランティアサポート活動に積極的に取り組むようになりました。そうすると早速新入学生も先輩につられて、先輩と一緒に、あるいは独自にさまざまな活動を企画していきました。そして早くも数年で入学から卒業まで学生主体、あるいは学部との合同で、企画、運営される行事や学部・大学を越えた取り組みが増えていきました。このような学生の活動には、社会人学生の影響もあったと思います。本学部では各学年約三〇〇人の学生のうち社会人学生が二〇名程度います。また学生により近い立場で学生支援を担当する専門的事務職員であり、履修やインターンシップ、就職活動などをサポートするキャリアアドバイザー四人と、本稿の主題の「相談実習」という授業を教員と一緒に担当するキャリア相談アドバイザー三人の存在も大きいと思います。いずれも紙幅の都合で詳しく述べられないのが残念です。

もちろん、これら学生の主体的活動には、教員や事務職員の責任者としてのかかわりは不可欠であり、学生の行動力にすべてを依存してしまうと、行き過ぎやポピュリズム、尻すぼみなどに陥る危険性もあります。実際、強力な推進役が卒業したら立ち枯れてしまいそうになり慌てて教員がかかわり出したというケースもあります。

このような経緯があって、本学部では、仲間を作って自主的に動き出し、そこに教員やほかの人たちを巻き込んでいくといった学生が増えてきましたが、いつのまにかこのような学生たちを「キャリアっぽい学生」というようになっています。「キャリアっぽい」の響きにどことなく「軽さ」が込められている気はしますが。

三　現代GPプログラムの導入と学生のキャリア意識形成

「近代国民国家」や「個人主義・市民社会」などという概

念は、欧米のものです。日本のようなアジアの一小国がそれを取り入れることはないとも思います。しかし、この国は鎖国を止めてその道を選択してしまいました。そして一章で述べたように今になって若者が戸惑っているのです。若者を本学部のコンセプトによる教育に載せ、戸惑いからの自立に向かわせるのに必要なことは何かというと、人と人とのつながりから学ぶことではないかと考えます。人と人とが真のコミュニケーションでつながりながら帰属社会の在り方を考え創造していくのが市民社会です。逆に市民社会にとっては、この人と人、人と社会がその関係性の中で学び合い、双方の能力を高めていく必要があるわけです。

そしてこの人と人とのつながりを作るために、二章の「キャリアっぽい学生」の活動にヒントを得たというか、すっかりそれに乗っかったというのが二〇〇六年度から三年間にわたって取り組んだ現代GPプログラムです。紙幅の関係で詳細は、すでに行った報告や文部科学省のホームページ等に委ねますが、一言でいうと二章で紹介したような活動を「キャリア相談実習」という科目にして一セメスターで原則三活動（一つの活動に複数の要素がある場合は複数の活動とする）を行うというものです。ただし、その前のセメスターでは、「キャリア相談事前指導」という主に場所は教室であっても参加体験型で行う授業を履修するということになっています。さらにそれらを卒業要件上の必修科目としたのです。後ろからそっと押して学生の自主性に期待するというのではなくて、突き飛ばしてでもやってもらうというものです。

本学部であっても、すべてが「キャリアっぽい学生」なわけではありません。人から、あなたはどう思うかなどと聞かれても「べつに…」と噛んでこない学生も若干はいます。しかし、この学部の教員は学生たちを性善説で見て、「今の若者でも機会が与えられれば、そこそこやるものだ」と、思わせてくれるはずと、信じたわけです。そして、まだすべての結果は出ていませんが、一般的な学生は必修の単位を取得しつつあります。ということで教員集団やキャリア相談アドバイザーもほっとしたというのが本音ですが。

学生は実習を行う度にレポートを書いて成果報告会で発表し体験を共有しますが、多くの学生がこのような機会を与えられなかったら決してこのような体験はしなかったと思うが、体験したことで自分の知らなかった自分を理解しほんとうによかったと、教員を泣かせるようなことを言います。そして、自らが主体となって、人や社会とかかわりながら学び、人生の質を高めていこうという「キャリア意

識」がついたものと思われます。それは、本プログラムの評価測定グループの評価にも現れていますが、次のニートやフリーターと呼ばれる若者支援現場で実習を行った学生のレポートからも分かると思います。最後に、名前等は伏せた形でそのまま示します。

私は昨年履修した授業を通し、若者自立支援や就労支援を行なっている団体の活動を知った。普段の学校生活では触れ合うことの出来ない、施設を利用する若者や職員の方々との実習を通し、物事を多角的に捉える力、広い視野や考え方を身につけたいと考え、今回の実習に望んだ。そして今回の実習を通し、二つのことを強く感じた。

一つ目は、施設を利用する若者への考え方の変化である。

若年就労支援を行なっている施設を実際に訪れるのは、今回が初めてだった為、若者としっかりコミュニケーションがとれるのか、私にも出来るのか、とても不安だった。なぜならこの様な施設を利用する若者は、今まで働く気がなかった人や他者と関わることを望まない人が大半だと考えていたからである。

しかし実際に施設での実習を行なってみると、施設を利用する若者の方から笑顔で接し、積極的に話しかけてくれた。また就職するためにパソコンのスキルを磨くなど、大変真剣に活動していることが解かった。私自身、心のどこかで彼らを特別扱いし、接することに不安を感じていた自分を情けなく感じた。○○先生や施設の職員の方々とのお話しを通して、私たちCD（キャリアデザイン）学部の学生は挨拶する際、法政大学CD学部の○○ですと名乗ることが出来るが、施設を利用する若者には所属や肩書きが無い。世間はもちろん、自分自身においても、所属や肩書きが与える安心感が如何に大切かを学んだ。またこの施設を訪れ、経済的な理由でパソコンに触れたことの無い人、様々な理由で転職を繰り返す人など、決して彼ら自身にのみ問題があるわけでは無い事を知った。施設を利用する若者は、本当に一生懸命就職するために努力をしている。私を含め、彼らを偏ったマイナスイメージで捉えてしまう人に、もっと若年就労支援施設について知ってもらいたいと強く感じた。

二つ目は、施設での支援活動。職員の方々の若者への接し方である。

若年就労支援活動というと、ハローワークのように若

者と企業との架け橋になる施設というイメージが強かったが、就職活動を行なう前にビジネスマナーやパソコン講習会など、働くためには無くてはならない技能を身につけられること、キャリアカウンセラーによる相談や社会貢献活動も行なっていることを知った。私自身も、施設を利用する若者が行なう職業適性診断を体験し、自分では解からなかった適性を知ることが出来た。

私は今回の実習を通し、施設を利用する若者と様々な話をする中で、若者の話を聞き5W1Hを使い、話を広げることはできたが、適切なアドバイスなどは全く出来なかった。施設の職員の方々は、真剣に話を聞き適切にアドバイスをされていた。そして何より、まるで自分の問題のように親身になって話を聞いている姿を眼にし、他者支援の難しさとともに、プロの方々の凄さを強く感じた。

この実習に参加し、今まであまり触れ合うことの無かった施設を利用する若者や職員の方々と接する機会を得、本当に多くのことを学んだ。もっと、この様な支援を行なっている施設や努力している若者のことを、多くの人々に知っていただきたいと強く強く感じた。